刊行にあたって

歯科医師は歯や歯周組織だけでなく、口腔の専門家であるべきと考えている。それは、少子高齢化とともに疾病構造が変化してきた時代の要求でもある。しかし、口腔の異常を示す疾患は多岐にわたり、全身疾患の一症状であることも多く、習熟には膨大な知識が必要であるが、厚い教科書を見るとうんざりしてしまう方も多いであろう。口腔粘膜疾患、口腔腫瘍などの口腔疾患に苦手意識をもつ開業歯科医師の気持ちもわかる。

私は口腔外科専門医として30年以上、診療に携わっている。その多くは問診や臨床所見ですぐに診断がつくが、未だに、なかなか診断がつかないことも珍しくない。長年やっていて、口腔疾患の診断は難しいと感じる一方、語弊があるかもしれないが、奥が深く「口腔疾患は面白い」と感じる。

本書には、頻出する疾患、稀だが重要な疾患、見過ごされがちな疾患など、さまざまな症例がそろっている。重要なのは正解することではなく、診断までのプロセスと、どうやって診断を進めていくのかを考えることである。実臨床でわからないまま漫然と放置して悪化させるような事態は避けたい。見逃してはならない疾患の代表は、口腔がん、造血器腫瘍などの悪性疾患であろう。前文では答えは明かせないが、今回、症状ごとに分類して改めて「ある症状」が悪性疾患の Red Flag Sign として有名であると再認識させられた。それが何かは読めばわかると思う。

本書に収載された123症例には、執筆した臨床医の想いが詰まっている。自身が経験した症例はなかなか忘れないが、臨床医一人が経験できる患者や症例は限られている。味気ない教科書を読むよりも、本書のような症例集を、自分が担当医になったつもりで目の前に患者を思い浮かべながら、推理して診断するほうがはるかに身になるはずだ。

患者が口腔の問題を訴えて来院したとき、本書がそれを解決するヒントとなり、読者と患者の助けになれば幸いである。

2019年１月

山城正司